

## 1 自己評価及び外部評価結果

### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0391000023		
法人名	医療法人 勝久会		
事業所名	グループホーム 金山・竹の里 (竹の里棟)		
所在地	岩手県陸前高田市竹駒町字相川73-30		
自己評価作成日	平成23年11月19日	評価結果市町村受理日	平成24年2月9日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www2.iwate-silverz.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0391000023&amp;SCD=320">http://www2.iwate-silverz.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0391000023&amp;SCD=320</a>
----------	---

### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	(財)岩手県長寿社会振興財団
所在地	岩手県盛岡市本町通3丁目19-1 岩手県福祉総合相談センター内
訪問調査日	平成23年12月8日

### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホーム 金山・竹の里では、「らしい」と気づき!「らしさ」を導き!「らしく」を知る!を基本理念に、日々職員は気づきを探して、一緒に暮らしています。地域にあるホームではなく、地域の中の1軒として地域に溶け込んでいる。毎月イベントを企画・実施して、入居者と家族、入居者と地域の方々、一緒に楽しんで頂ける機会を設けている。  
3月の震災時には、いろんな方から支援を頂き、なんとか乗り越えることができました。今こうして生活できているのは、皆さんのお陰です。ありがとうございました。

### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

気仙管内に医療機関や介護保険事業所を数か所設置され、総合的な福祉事業を営まれてる法人をバックに、陸前高田市の竹駒町の高台の住宅地の一角に、2ユニットのグループホームを設置している。同敷地内にデイサービス・小規模多機能施設もあり、互いに連携を取りながら運営されている。大震災による市内の甚大な被害で環境が大きく変わり、ホームの周囲に仮設店舗などが並び、前方の県道の往来が激しくなったが、ホームからの買い物などは徒歩で行けるような状況。当ホームでは自治会の一員として地域内の定例会議には職員一人が出席し、回覧板も回り、地域とホームはイベントなどを通じて絆が深まっている。各職員が利用者1人~2人を担当し、本人家族と話し合いケアプランを立てカンファレンスを行い、計画担当者が修正することによりケアプランが成立している。センター方式を実施していることもあり、担当者が身近に利用者を観察しプランを立てるので自らの訓練にもなる有益な方法を行っている。母体法人が営む訪問看護事業所と県立病院の連携体制が良く取れているので、利用者の健康管理の面でも非常に恵まれた環境下にある。震災の被害が職員・利用者ともにあったとのことだが、滅入らずに明るく、暖かい雰囲気を保ち、非常に印象的である。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	基本理念は『「らしい」と気づき、「らしさ」を導き、「らしく」を知る』と掲げ、職員が共有している。ホーム内に理念を掲示している。異動してきた職員にも、方針を伝え、理解してもらっている。	管理者を中心に同ホームの職員全員で作り上げた理念である。利用者の状態をその都度、早急にキャッチし、的確な判断と対応に心掛け、家庭的な雰囲気の中で、自立に向け安心と尊厳のある生活を営むことを支援するように意思統一されている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	ホームで行事を行う際には、職員と入居者が近隣の家を回り、案内を出している。毎月20日の地区定例会に職員が出席し、地区の様子や行事を伺い、参加できるものであれば入居者と一緒に参加するようにしている。運営推進会議開催。	自治会に加入し、一地域民として会費も納め、地域の会議や、様々なイベントなどにも参加し、また、地域の方々がホームの催しにも来られてる。自治会長がホームの近所に住まれ推進委員会議にも出席していることも幸をなしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地区の定例会に参加した際に、悩み等の相談を受けられるような体制を取っている。運営推進会議で認知症についての勉強会を行った。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回、第3金曜日に開催して、最近では震災についてのことを話し合った。会議で話された事を月1回のスタッフミーティングで、報告し、日々の業務に活かさせて頂いている。又、議事録を家族へ郵送している。	震災で一時会議を休んでいたが7月から2か月に1回ペースで始まった。利用者家族・民生委員・自治会長・消防署・市職員・市議会議員・法人内の職員などのメンバーで構成され、主として震災についての話題が多い。内容はホーム内の職員にミーティング時に報告し、また、家族にも議事録を郵送している。15分くらいのミニ勉強会も同時に行うことがある。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	2ヶ月に1回、市役所で行われる会議に出席して、ホームの近況報告や待機者状況等、情報を提供する機会を設けている。そのほか、行事をする際には、案内を出している。運営推進会議に参加して頂いている。	2か月に1回の市役所での地域ケア会議やホームでの運営推進会議で同席し、情報交換などを行う。震災後、甚大な被害を受けた市での認定更新等の諸手続きは遅れがちである。しかし、徐々に復帰されるものと期待している。その他の重要要件は法人事務局を通して間接的に連絡がある。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	拘束はしていない。鍵は日中かけていないが、夜間は戸じまりの為にかけている。日々の業務の中でも、外に出たがる入居者には、できる限り職員が付き添い出れるように努めている。	法人内での合同勉強会が毎月あり、ホームの職員にはその都度報告し、共有している。帰宅願望のある利用者も若干いるが、それぞれ職員はコツを覚え、散歩、ドライブ、話術などで難なく過ごしている。身体拘束は必要としない。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者の尊厳を大切にしたいケアを心がけ、職員による虐待の徹底防止に努めている。		

岩手県認知症対応型共同生活介護 グループホーム金山・竹の里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度について職員に説明、理解に努めている。入居者が必要と判断された時には、入居者・家族に制度の説明を行い、活用できるよう支援していききたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は十分な時間を取り、説明して入居者・家族から納得をして頂いたうえで、手続きを進め、問題点の解消を怠らないよう注意して、同意を得るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者と話をし、そこから思いを気づけるように努めている。家族面会時には、気軽に話ができるような雰囲気作りに努めている。運営推進会議には、家族に参加して頂き、意見を求め、頂いたものに関しては、職員間で話し合っている。	主に居室担当職員が利用者と話し合い、そこから思いを察したり、家族が面会時に来られた際に、気楽に話し合えるように気配りをし、利用者の思いを叶えるように努力している。改めて家族会は設けていない。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回のスタッフミーティングで、意見や提案を聞くようにしている。また、平日頃より、何でも話してもらえる環境作りに努めている。職員交流会とした飲み会も開いている。自分の意見が業務等に反映されれば、意欲向上につながると考えている。	職員の平均年齢は非常に若く、孫と祖父母のような雰囲気が漂っている。毎月のスタッフミーティングで職員から意見、提案を出して頂いている。職員交流会も時には行っている。1時間のミーティング内で、前半はユニットごとに後半は全体で行っている。ホーム内の掲示物やイベント時の準備等は殆ど職員の案である。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人内で人事制度を導入しており、職員一人ひとりと管理者が個人面接を行い、目標設定を立て、目標をクリアできるよう向上心を持ち、日々勉強している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	各種研修会には、適任者を参加させ、専門的に業務に従事できるよう努めている。今年度は、認知症実践者研修や学習療法に関連する研修に参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県の定期定例会・沿岸南ブロック定例会に参加して、その中で勉強会や他ホームの職員と意見交換をして、情報収集の場として、サービスの質の向上につなげている。認知症介護家族の交流会にも参加している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ホームに見学に来た時と、入居時に、これまでの生活歴やこれからの生活への不安・要望等を、家族や本人から得た情報を考慮し、日々のケアにあたっている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	初期だけでなく、常に家族と連絡・相談を行っており、その都度、不安や要望に答えている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	その時の本人の状態、本人や家族の希望を取り入れながら優先順位を見極め、本人・家族が納得する対応をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	高齢者として尊重しつつも、家族のような関係を築けるよう心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族とは常に連絡・相談できる関係で、本人にとって良好な状態で過ごせる環境作りを整えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	一部であるものの、自宅に行きたいという本人の思いをふ叶えたり、ふるさと訪問(本人の生まれた家、嫁いだ家、近所に行く)等、行える支援を続けている。馴染みの美容室を継続して利用している。	大震災で、町内の馴染みの場や人が大きく変わったがホーム内での利用者の動揺がなく、ふるさと訪問や美容院には今でも出向いている。被災された自宅にも同行したが、大きく悲しむことがなく安心している。地域の方々からは時折野菜の差し入れがある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	それぞれの生活リズムで過ごして頂いているが、皆さんで過ごす時間も作り、交流する場も大事にしている。		

岩手県認知症対応型共同生活介護 グループホーム金山・竹の里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用者の方が退居されたあとも、必要に応じて今後のこと等、本人・家族からの相談・支援は継続している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	センター方式でアセスメントを行い、本人の希望や意向の把握に努めている。困難な時は、家族から話を聞き、職員が共通認識を持ち、その人らしい生活を送れるように支援している。	利用者1人~2人を職員が担当し、意見要望に対応している。殆どの方が対話可能だが難しい利用者は、表情や行動から判断し対応している。また、家族が訪問された際に話し合い、情報を聞き出している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族から情報を集め、職員間で共有し、よりよい支援につなげられるようにしている。環境面は、本人・家族の好みで居室を整えている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居者各々の生活リズムで、落ち着いた生活を送れるよう模索している。生活記録や健康記録をチェックし、職員が共通の現状の把握ができるよう心掛けている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族の意向を確認した上で、全職員でケアカンファレンスを行う。その他、毎日のミーティングの中でも、意見を出し合いモニタリングしている。状態変化した時には、必要になったケアを家族に相談しながら取り入れている。	主に担当職員が本人・家族の意向を確認し、プランを組み立て、スタッフミーティングで話し合い、作成担当者が総合的に調整しプランを作成している。作成したプランは家族に確認してもらっている。半年に一度は見直しをしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	生活記録だけでなく、申し送り表や連絡ノートを通して職員間で情報を共有し、評価や計画の見直しに役立てている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	グループホーム入居のため、利用できるサービスは限られているが、解決できないニーズが発生した場合は、法人内の他事業所に相談している。		

岩手県認知症対応型共同生活介護 グループホーム金山・竹の里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	毎日、近所のスーパーや産直に買い物に行っているおかげで、顔馴染みとなり、買い物だけじゃなく、世間話もして楽しい時間を過ごしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	震災後も、かかりつけ医・家族の協力を得て、適切な医療が提供できるようにしている。家族が受診対応するときには、ホームでの健康状態を文書として渡して頂いている。県立高田病院と松原訪看と連携して看取りを行った。	震災後は、法人のクリニックでの診察が主である。また歯科医も被災されたが、その後、仮設で対応されている。家族が通院対応するときは、健康状態・ホーム内での日常の記録を渡し診察に対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回定期的に訪問看護師が来所している。体調の変化や急変時にも対応して頂き、記録物による連絡で情報を共有している。看護師から報告を受け、家族に連絡して、受診することもある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、家族同意のもと、ホームでの生活状況を地域連携パスシートで情報提供している。また、できる限り病院に面会に行き、本人の状況を把握できるようにしている。退院日が決まれば、主治医からムンテラをして頂き、スムーズに退院できるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人の身体状態を見て、本人・家族の意向を確認した上で、看取りに関する説明を行っている。ホームで看取りを希望された場合には、往診可能な医師へ主治医を変更して頂き、継続して支援できるよう主治医や看護師と連携を取っている。利用者一人ひとりが、その人らしい生活を最期まで送れるよう支援している。県立高田病院と松原訪看と連携して看取りを行った。	本人・家族の意向を良く確認した上で、看取りに関する説明を行っている。県立高田病院が被災されたが、仮設で診療対応しており、依然と変わりなく母体法人の松原クリニック、松原訪問看護ステーションと連携を取りながら看取り対応が可能である。過去に2度看取りを行った経緯がある。職員の研修も行っており、家族の同意書も作成している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時のマニュアルを作成し、連絡体制の整備、初期対応ができるよう図っている。敷地内にAEDを設置した。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	震災時、事故なく避難できた。これは訓練の賜物だと思っている。運営推進会議で、避難場所として提供できることを伝えていたが、実際に避難してきた方はいなかった。震災後、職員の夜間召集訓練を行った。	ホームから近距離の職員から連絡できるように、連絡網が作成してある。大震災時には利用者の大きな動揺はなく、職員の速やかな対応でホームの外に避難でき、利用者の状態が大きく変化することがなかった。その後、夜間の職員招集訓練も実行した。	同敷地内に、法人の諸事業所があり、災害時には互いに連携対応が容易にでき、恵まれてはいるが、屋外に避難する際の見守り等で地域の人々の応援が一人でも多い方がよいと思われる。また、近くの方々に通報するホームからの警報装置（電光・警笛）の設置も考えてみていただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者一人ひとりの性格を理解した上で、言葉掛けや言葉遣いに気を付けている。慣れ合いによる不適切な言葉になる時があるので、確認し合っている。	法人内での接遇委員会があり、1月に研修を実施する予定。職員は利用者の長所・短所・身体的な欠陥を良く知り、自分がその立場になったつもりで対応し、特に長所を褒めながら自立への支援に向かって努力している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の希望にできる限り添えるように、職員間で相談し対応している。「～お願いしてもいいですか?」「～はどうですか?」という言葉を使うようにし、指示的な声掛けをしないように気を付けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個々が居心地よく生活できるよう環境を整えている。その人の意思を尊重し、できる限り希望に沿った生活を支援している。生活のリズムがつくよう、一人ひとりが好きなこと、できることを把握理解しケアしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分の好み、着たい服を選んでもらっている。女性は化粧やマニキュアをする方もいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	その方の能力に合わせ、今まで培ってきた調理方法を発揮できるよう、準備から後片付けまで職員と一緒に役割分担しながら行っている。また、イベント食や外で食べる機会も設けている。	与えられた予算枠の中でバランスの良い基本メニューを作るために、職員全員で知恵を出し合い、努力している。準備・片付け等は職員と一緒に役割分担しながら行動している。利用者の体重管理も行っている。機会を見て外食もし、リズムのある支援にも心がけている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとり食べられる量を提供している。食事や水分摂取量を把握できるようチェック用紙に記入している。水分量は1日1500mlを目標に、1000ml以上摂取できるよう、工夫して提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、声掛け・誘導し、その人に合わせ見守りや介助で対応している。口腔ケアを行ったか、チェック用紙に記入している。		

岩手県認知症対応型共同生活介護 グループホーム金山・竹の里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンの把握し、便意や尿意のサインに気づくよう努め、極力トイレで排泄できるよう個々に合わせた誘導をしている。羞恥心に配慮しながら、気持ち良く排泄できるように支援している。	全員を対象に排泄チェックを行い、トイレ誘導に有効に利用している。殆どオムツは使用していない。時々失敗することもあるが、職員はプライバシーに配慮し、さりげなく処理し、自立支援に努力している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	薬に頼りすぎないようにしたいと考え、水分量を確認して、水分不足にならないよう、また毎日乳製品を飲用して対応している。食事にも繊維質のものを取り入れるよう心掛けている。毎朝、軽体操で体を動かす時間も設けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	健康状態に合わせて形態をかえている。夜間浴を希望される方には、夜間入浴で対応し、拒否がある時には、声掛けに気をつけ入浴できるよう配慮している。入浴が楽しいものになるよう、希望を聞きながら、個々のペースに合わせて入浴している。	2日に1度の入浴にしているが、希望に応じて変更することがある。殆どの方が自分で着脱ができ自力入浴が可能である。衣類の洗濯物もその時に出すように支援している。温まると安眠できる方には就寝前に入浴するようにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	皆さん夜間安眠できている状態なので、日中でも自由に休息してもらっている。居室の照明・温度の好みを聞いて環境面にも配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方箋にて内容を確認を行い、服薬時はマニュアルに従いカートを使用して誤薬を防いでいる。処方変更の時は、職員で周知できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	掃除や裁縫、食事の準備等、一人ひとりの生活歴や潜在能力を生かした内容を実行してもらい、意欲向上につながる支援をしている。コーヒー等、好みに応じた嗜好品の提供をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	毎日の食材料を買いに近くのスーパーや産直に出かけ、店内で知人の方に合ったり、赤ちゃんを見て喜んだり気分転換を図っている。他にも、ドライブや散歩をして、季節を感じてもらえるようにしている。	震災後環境が変わり、スーパーが近くなったので頻りに職員とマンツーマンで買い物に出かける。天気の良い日は、急に計画しドライブや散歩に出かけることがある。回覧板を廻しに近所に職員と同行したりして常に気分転換ができる支援を心掛けている。	



岩手県認知症対応型共同生活介護 グループホーム金山・竹の里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的にはホームで管理しているが、欲しい物・必要な物があれば、残金を確認し、一緒に出かけたりして支払いしてもらう。家族には、小遣い帳を見せ理解してもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自宅に電話をかけたいと希望があった時は、職員付き添うの下、電話をかけている。電話、手紙共にいつでも受けられるように、家族や面会者に伝えている。毎年、家族に年賀状を送っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	清潔や安全に配慮しながら、家庭らしい空間を作れるようにしている。行事の写真や季節の花や飾りを演出している。自分たちで作成した物も飾っている。	ホーム全体がバリアフリーとなっており、キッチン・食堂・リビングが広いスペースに配置され広い廊下があり、居間の窓越しに田んぼ・クルミの木・柿の木・民家の植木など四季折々の風景が楽しめる。リビング内ではクリスマスを真近に賑やかに飾っており、楽しい雰囲気をかもしだしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	座る場所など自然に定位置が決まり、そこが馴染んだ場所となり過ごされている。サンルーム・自室・ソファ・テーブルと思いつきの場所で過ごされている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に、できるだけ自宅で使いたれた馴染みの物を持って来て頂いている。家族にその意図を説明するも、新しい物を購入される方もいる。家族や自分の写真を飾るなどもしている。	全ての部屋がフローリングで広く、落ち着いた作りである。ベット、手洗い、温風ヒーターが備えてあり、希望者には畳を敷くことができる。思いおもいの私物を持ち込んで多様な部屋づくりがなされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの場所がわかるよう表示物を作ったり、安全に生活できるような環境面に配慮している。		